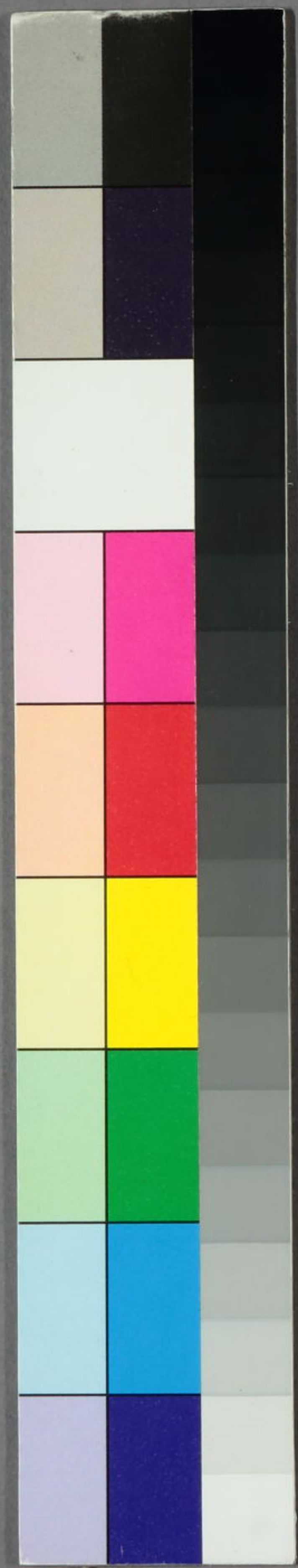


あさる集



義濃結郷

卯月集

松柏亭麥嶺編



皓の星初月をのぬーハ正門の
凡雅ーちうはさーぬうーやうんぬ
又古梁坊世ーありーは月言記ハ
つづも片ー雨を飲つん風を流すて
月くーの雅遠少も三里ー宗統が
り程を流きおる里ー通ぶらさ
そのあめー健ありーもさうり

人をも教へて倦まぬの生憎ある
くろくろくろくろくた凡客はあつた
慕ひく絶り地を初まぬこの
叟のさへあつたつらつら
くろく病を事あつて生憎ある
くろくせすく事ハくろくせす
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて

ぬきの後くろくおぬの生憎ある
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて
くろく病ハあつてくろく病ハあつて

ましの
くろく病ハあつてくろく病ハあつて

文研

世の暮ききく鳥の夕那也

く沈ても月く又袖の夜 麦尻

嶮しさのかさあれんく秋更く 里風

十年ちうた棟ハ移くく 麦雨

響の歌えんくかのく待くく 薫子

履ふかしく沈て寝たり沈の夜 二際

うは玉の夜を又まきのまの 柳枝

淀物に船く舟くまんとく 松素

この書けく扇の面をまかれて 麦流

十ヲおもたぬ兒の如くく 松ら

橋ハくくも薫れ氏あれや 李園

親日なもく愛れく牛 西甫

指打て待日ものひく 膝の丈 之游

瓦拂ハせて氣をりハあし 作下

うけ負のあきくく橋も静きき 物友

まことしに神如傳のあり

流古

新よれ果報はくぬあまらる

有誓

七日、七日彼名書の能

茂方

とあ腐し活太根のぼひる

曹行

清ねうしなまは又の噴

櫻和

方地を歩らしなれまの痺

此字

尾上、まふまの夕ら

友柔

との寂し頭上の簾のあはれ

法流

12

まうれて吾もほまほま

二際

神くけし人のいり娘ゆ

自坊

夜まはいつもあちあち

里彭

鳴揺り石をさやうと古程

赤臺

り宮りも落りて空

花膳

二空の月寂はあれ小危

梅古

ゆきもあれハ芦さかく

文橋

居ふれ名譽し喜と氣まいて

松二

渴のとゆれ呪もう那

李俎

祝ひ事し海々新々案静り

松の堂

ふさふさい億古の冠り又送りて

吐紅

糸代の考くおれまの糸

義水

故亭

右哥仙行

出席探題

襟も未だるるをぬ息のけうりり波水

松枝の黒くり唐の夜長吉里凡

朝方や松何とあく高きと純、有愛

名月や又あなを星の露疎大野二襟

ぬ、星も木の音り又て杜きぬ、柳枝

秋とけいけいふまうまう吉葉子

春の世とるる月のとる月とる 春の 夏雨

晴き門て候しとるも夕なり 大表 松夢

にやまおもあかりとるさめいふ、 暁 流

時もあし浦あり秋の暮 暁 季同

夕方あり禁火とるり番の家、 松 下

あやきたる浮森のまのや鴨の夢、 西南

じしやとるも月乳の落く 机 自坊

とる乳のまし初めし秋の凡、 里 朝

とる乳のましくおろし 結 年下

何々ありとるの海や 西 栞雨

とるまゝとる地とる 作 二際

あの中とるハ青うとる月夜 魯 行

名引とるえとる浦の月、 流

踊子の青とる起とる 友 葉

砂の庭、月とる入とる 北 宇

蚊帳は舞とる 心 標

まゝとる子種 茂 方

桐の木 又 古

鶺鴒のふくあきてや 岩の上 伊勢 雲

こく霧ハ晴のね凡や夕暮れ、素融

庭掃除を致も秋の風 改草 塊

この虫のまきれぬや 庭の草、支紅

木犀の香や寺をハ遠りれと、箕三

凡のそ庭く 秋の山一葉うま、目夷

あまたく 野ハ晴やふの月、仙菓

畑その片溜ハ 夢て 昔の花、結あ

あつ〜〜森をくれても 美の夢、乍賢

菊をま〜〜く〜を 誓れ 菊見うま、西茶

お花ハ吹〜〜あのも〜〜たうま 揖斐 梅二

あ〜〜替〜〜田舎もあ〜〜り 菌 得 借水 畦 仙

と寺の隣より 覽の月夜ハ、里全

船をゆ〜〜る香や〜〜けり 秋の芳、素遠

うつろハぬ 秋のけり 香や 鶺鴒 福崎 利川

ゆ〜〜れ〜〜月〜〜溜〜〜ら〜〜ち〜〜る 柳、あ 和

り秋や鼻の鼻をさすの感 沢 一声

り秋や鼻の鼻をさすの感 南方 古香

り秋や鼻の鼻をさすの感 上秋 一矢

り秋や鼻の鼻をさすの感 志名 二標

り秋や鼻の鼻をさすの感 古指 壺吹

り秋や鼻の鼻をさすの感 黒野 流 左

り秋や鼻の鼻をさすの感 北方 子 琴

り秋や鼻の鼻をさすの感

り秋や鼻の鼻をさすの感 十六村 高泉

り秋や鼻の鼻をさすの感 琴呂

り秋や鼻の鼻をさすの感 極致

り秋や鼻の鼻をさすの感 吉為

り秋や鼻の鼻をさすの感 由可

り秋や鼻の鼻をさすの感 章風

り秋や鼻の鼻をさすの感 子柳

り秋や鼻の鼻をさすの感 梅仙

大あり種のを尾永一秋の言 と葉 中我

鷗鳴や尾あつまくの夕日影、箕石

ささけりも一少小田のうら 早野 一仙

凡然の布あもたけり、秋の凡、一凡

菊畑寂しきもあけさき一うり、右石

階子田や蛆のこもる稲穂、思光

あつせや亭の上あれ月の度、三鳥

木の葉より淋しと秋を暮るうり、枝友

亭の海をくくの月夜 山片 陸

桐の葉より藤おまたあしき、ぬき

松の声やんこぬきをいほりか、里幽

はくくくくくくくくくくく、青志

菊く揺る人も年々秋深きか、葵汀

波あ絶てま尽もくつや西士衣、嘆三

鶴やのちあきくぬきけの石うき、佳切

秋の種後庭もあきひり、甫三

養ひしや常とありし膏の飯 北方 古棠

鳥息をくくくくよふひくく、茶珍

一声のあや霜ゆき鳥の月 添 鳥曉

稲つちや雖もけハハハの園 馬永 残夕

一とせのち入やえとて薫のあ、杖常

いつもあはれ垣根をぬえん海江、花欽

時くりて一ツあがり大のちりり 大垣 昌山

海つくえん退り尾赤の凡ど能、可柞

草の枯つふいし母の糸 見延 元曲

えれしや常や垣根し萩のあ、二中

穂葉に長し穂戸田面の白、一花

まふ早のももえハふぬ月夜が、呂聲

厂のあや夜の船の苔と傳れ 上保 停川

ひきくくあやう秋の夕日水 ニッ橋 塘宇

芳晴く鳥葉の煙れ山家、保先

ありきく鐘ハ滝あり秋の音 切通 灯丸

ふるやきりの下り 小松原 麻野 玄言

まじくんとあまのうらみ 小西 女 恋

さうり君の二人よあれと秋のきり 改田 収至

若うきあまの掃くやの夜やぬれ木の葉、柳流

反響古の射除あうり早り夜 おき坊

ゆるやんえんあまの一本茶 結 寛源

高く松ハきのの森くくあまの佳地

夕アまハあうり松くく 大正 英芝

ふるやりのハ被物、向すも、杉原

あまのあまのきり 泉 選心

秋のあまのきり 大正 帰之

此院の口とくく 茂 恭

後を 宝 きく

ふり秋の凡推櫓のる 東野 里し

ふり秋のあまのきり ハス 松江

日く夜くしやあはくえくく同く月
の五日未の別をうりくはくあく善衆の
懐くゆたきくう子孫昆骨亡骸く
死つと洞のぬき命をくまのあはくあはく
予ハ世くくあはくあはくあはくあはく
なれくくあはくはくあはくあはく

強くま、勝くまむ秋く風 夏風

伯父焦古老人のくあはく平く継承を
信く凡あき月とあはくくは時く屋の
あはくくハ水村と都くはあはくあはく
あはくくくあはくあはくあはくあはく
あはくくあはくあはくあはくあはく
恩あはく浴く杖父くあはくあはく
あはくくあはくあはくあはくあはく
あはくくあはくあはくあはくあはく

軍夜より炮火とけり真の水と詠ん

はれとて

歌にけりともなかりり結の音

故事

蕉翁の何内より清翁の心を度え

まひらり儒の宮より虚をのまも

佛の虚より宮ありともあはれき老

在揚墨の何の心とて詩の體魁

あきの修精よともはらりて

俗談多結くナセとてよとて

時々悲ひありてその中よりかゝるの

心とてあはれ事ハ能清の果ありて

われハ能清とて能清よありて

人ありて心とて心とて心とて

あはれ人ありて心とて心とて

